

機関番号：50104

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520657

研究課題名（和文）

首都ストックホルムと製鉄業から見た18世紀スウェーデン社会と対外関係の研究

研究課題名（英文）

Swedish Society in Change and the Commercial Policy in the 18th Century from the Perspective of Stockholm as a Capital and the Iron Trade.

研究代表者

根本 聡 (NEMOTO AKIRA)

旭川工業高等専門学校・一般人文科・准教授

研究者番号：80342442

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は、17世紀にバルト海帝国の中心都市として繁栄したスウェーデン王国の首都ストックホルムが、18世紀中葉以降に停滞に陥った原因について、鉄貿易と対外政策の観点から考察することである。その際、外国人の卸売商人、通称「船橋貴族」に注目することが戦略的に有効である。航海法や貿易規制による重商主義政策と首都優遇政策が、この一握りの商家を繁栄させ、彼らの貴族的な衒示的消費生活を促進した。このことが経済の自由化を要求する首都以外の諸都市（特にヨーテボリ）や他の階層の反発を招き、新種の企業家と交替していったことが判明した。なお、最重要輸出品の板鉄製造現場であるブリューク（製鉄工場村）の実態分析をもとにした「船橋貴族」のそれへの関与の在り方については、目下調査中である。

研究成果の概要（英文）：

This research project aims at examining of some reasons why the 18th century Stockholm as a capital in the kingdom of Sweden (inclusive Finland) came to a stagnating metropolis in the Baltic World. In this purpose it is strategic and relevant to give a central attention both to the Skeppsbro nobles in Stockholm's old town, who were a handful of the wholesalers, and to the trade of bar iron as the most important export items. Many different kinds of regulations and laws according to the spirit of the times of mercantilism, e. g. so called Bothnian trading restriction, Navigation Act 1724, the hallmarking authorities or the Exchange office, and bans of import goods etc., gave Stockholm her special favourable and advantageous position at the expense of other domestic cities and places. But this policy which was driven by the Skeppsbro nobles belonging to the Hat Party caused some obstacles of the further growth of Stockholm. It depended on lack of the idea on free trade, even if it had limitations of the age. The monopolistic prosperity of the capital stimulated the Skeppsbro nobles to a conspicuous consumption, that made not only them aristocratic but also Stockholm stagnating, because other cities and groups of merchants as well as manufacturers had a strong desire of the deregulation of economic activities towards the coming of the new era, i.e. the industrialization in the mid-19th century.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：スウェーデン史、北欧史、経済史、政治史、国際商業史

科研費の分科・細目：史学、西洋史、北欧近現代史

キーワード：スウェーデン、首都ストックホルム、バルト海貿易、製鉄業、ブリュック（工場村）、板鉄、船橋貴族、重商主義

1. 研究開始当初の背景

なぜ18世紀ストックホルム史の研究を中心に、製鉄業と鉄貿易を基軸にしたスウェーデンの対外関係に関する研究を着想するにいたったかといえ、中近世スウェーデン史、とくに17世紀ストックホルム史の研究に長年従事してきたからである。しかも、これに先行する科学研究費基盤研究(C)「ストックホルムから見た近世スウェーデンと環バルト海世界の研究」(平成17年度～19年度)を発展させて、ストックホルムの成立・発展・停滞・復活という通史の叙述に高める必要が出てきたからである。さらに、スウェーデンという一国史の観点からだけでなく、広くヨーロッパ史の観点からみても、ストックホルムの都市としての特異性は注目に値するのであり、その盛衰の歴史をつまびらかにすることは、比較都市史の比較首都史の観点からも重要であり、本邦未開拓の分野であるにとどまらない希少価値をもっているからでもある。

この点について付言するならば、この都市の首都としての17世紀における発展も、18世紀中葉以降における停滞も、それぞれ他のヨーロッパの首都と比べて、もちろん共通性は多々あるものの、それ自体ユニークな現象であると考えられるためである。その主要な独特な特徴とは、第一に、ストックホルムは、王城が座する宮廷都市であり、商業都市ならびに海港都市でもあり、それと同時に軍事都市(海軍基地かつ宿営都市)でもあったという多重機能都市であった点である。第二に、ストックホルムの歴史を通じてつねに、スウェーデンという国家のなかで、当都市への政治・経済・文化的な機能の一極集中度が高かった点があげられる。例外は、宗教的権威当局がこの地では前面に出ていないことぐらいであろう。すなわち、大司教座はウプサラに譲り、ゆえにこの国で最も伝統のある大学もウプサラに存在する。第三に、当都市は、盛衰を経ながらも、19世紀後半の産業革命後に、遷都することなく首都として生き抜いてきたところか、現代においては先進的な環境都市(エコ・シティ)の成功例として世界的に高く評価されていることである。

いったい何が、スウェーデンのような小国の、人口面でも小規模のこの首都を、750年余りの長期のあいだ、支えてつづけているのだろうか。これが根本的な問いである。

2. 研究の目的

(1) 18世紀スウェーデン社会の特質を解明するために、第一に、ストックホルムを分析視角において、17世紀に首都に成長したあと、18世紀に当都市が停滞を経験したのはなぜか、その要因を考察することである。

(2) 大北方戦争後の「自由の時代」と呼ばれるこの時期のスウェーデン王国は、政治的には、絶対王政から脱して、二大政党による議会政治を実現させた。経済的には、重商主義的な思潮のもとで商業規制策を敢行し、主に貿易と海運を推進・育成することによって、他国との競争に敗れないように、国力の増強を図っていった。そのための産業政策の一環が首都を中心にはりめぐらした商業規制であり、首都優遇策であった。このようなスウェーデン王国がとった商業政策の内容を詳細にあとづけて、その意義と影響を考察することが、第二の目的である。

(3) 第三に、上述のような商業政策を通じて、首都だけでなく、それ以外の諸都市や諸地方においても、製鉄業や繊維業、さらには造船業等のマニュファクチャーを中心に、「工業化以前の工業化」を進展させていた。この動向を「プロト工業化」とスウェーデン学界でも呼び、ヨーロッパの他地域のそれと同様、スウェーデンにおいても盛んに議論されているテーマである。そのスウェーデン版プロト工業化論には、大きくいって二つの流れがあり、一つは織物業に関して、いま一つは製鉄業に関して、である。前者はストックホルムで行なわれ、後者はベリイスラゲンという鉱山地帯とウップランド州で行なわれた。スウェーデンのプロト工業化の最大の特徴は、繊維業だけでなく、鉱山業において進展したという点があげられる。とくにワロン鍛冶による製鉄業を通じた板鉄製造は、典型的な輸出向けの工業であったという意味で、プロト工業の好例とみなされうる。ただ、このようなスウェーデンのプロト工業が、この理論がこれまで依拠してきた前提どおりに、ギルドや商人団体(近代的会社以前の商社もしくは商会)といった伝統的な制度機関を解体させたかどうかについては、大きな疑問が投げかけられる。よって、スウェーデンのプロト工業化論の最新の研究動向を、泰斗ラルシュ・マグヌソン博士の研究をもとに詳細に検討することが、本研究の目的の一つとなる。

(4) こうした大きな趨勢と言うべき歴史的

プロセスに逆行するかのようになり、18世紀中葉より首都においては「脱工業化」が生じた。そこで第四に、18世紀スウェーデン王国においては、首都の停滞とあいならんで、他の諸都市や諸地方においては産業の発展が見られるという不均衡な展開の理由は何かを考察することとなる。この問題に関連して、他のヨーロッパの首都や諸都市と比較しながら、スウェーデンの18世紀社会の特異性を明らかにすることが目指される。

(5) 第五に、スウェーデンで最も重要な物産かつ輸出品である鉄に注目することによって、18世紀スウェーデン社会の変容と、ストックホルムの停滞要因を分析することが、本研究の基調にある問題関心であるため、この問題について、「ブリューク」と呼ばれる製鉄工場村の実態を解明することによって、産業革命が本格化する19世紀にいたるまでのヨーロッパ世界経済の拡大のなかで枢要な「世界商品」でありつづけた板鉄の製造と販売の在り方について、この板鉄の主な輸出港であるストックホルムの成長から停滞の過程と関連づけながら、考察を深めることにしたい。

(6) 最後に第六点目として、とくに第四および第五の点を発展的に研究を進展させることで、ヨーロッパ全般の問題と関連づけることを、本研究は意図していることを付け加えておきたい。すなわち、本研究は、「工業化以前の工業」についてのわが国の研究に、イギリスや低地地方の例外的に先進的な地域ではない、スウェーデンという周辺地帯（ウォーラーズティン流に言えば、半周縁）の事例から新知見を与えることが期待されるだけでなく、歴史学上の大問題である産業革命論に通じるものである、と言えよう。ところが、わが国ではスウェーデンからの視点が皆無と言って過言ではない状況であるだけに、抽象論に終始しがちな近代国家形成の諸問題に、軍事財政国家の具体例としてのスウェーデンが近世期に企画した産業や商業に関する政策からアプローチして、製鉄業史研究を中心に、その生産された商品を取引する国際商業や国際武器貿易との関係性を明らかにすることを通じて、これまで知られていない視角と視点から貴重な貢献ができることと信じる次第である。つまり、スウェーデンの事例からヨーロッパ全般におけるプロト工業化論と近世国家論を関連づけること、すなわち経済史と政治史を結びつけることが、本研究の背後にある大きな目標である。

3. 研究の方法

(1) 第一に、18世紀ストックホルムの停滞要因の解明にむけて、先行する17世紀の首都としての成長を支えた諸々の政策と規制、なかんずくボスニア海域商業強制と三次

にわたる商業令、ならびにステーブル都市体系を分析することで、その前提条件を考察する。

(2) 第二に、そのうえで、18世紀にとられた重商主義政策について、具体的な政策とその提案にもとづいて、なかんずく1724年の航海法と貿易関税免除令に着目し、それと同時に各種の事務局制度（「コントロール」という。為替局、製鉄協会、製造業検査認定局等の設置）にも目を配りながら、それらに関する制定と設置の過程を物語る史料の分析を行なっていく、という方法をとる。その際、議会における各諸身分（スウェーデン議会の場合、貴族・聖職者・市民身分のほかには農民身分もあった）の議事録や、政治パンフレット、ならびに法令とその計画案、さらには政治家や大手商人の回想録などを広く渉猟し、解読することが有効である。

(3) 第三に、ウップランド州で隆盛であったワロン鍛冶をめぐる技術と労働形態についての現地調査をすすめるという方法である。このワロン鍛冶による製鉄業とは、旧来のペリイスラーゲンでの製鉄法。すなわちドイツ鍛冶による鉱山農民がチームで製鉄する中世以来の伝統的製鉄法と異なって、当時としては近代的で自給自足的なコミュニティとして機能した広大な製鉄工場村であるブリュークを建設して、板鉄製造に特化した形で生産を行なう工場施設方式による工業のことである。すなわち、板鉄に加工するための原料鉄や銑鉄の生産および木炭づくりは別の地で行ない、ここブリュークでは板鉄製造への特化を徹底したのであった。ところが、このワロン・ブリュークも、近代工場までにはいたらない手工業的要素が色濃く残る工場施設なのである。職工自らが交替で鍛造するハンマー鍛冶に依拠していたためである。ただし、ここには、生活の一切切が可能な自給自足のコミュニティをつくりあげた。主の邸宅が広大な敷地の中央に占め、工場施設のほかに、農場も付設され、学校や教会に、労働者の住居も、市場も倉庫もあったのである。このような近世スウェーデンに特有なブリュークと呼ばれる製鉄工場村の実態調査を行なうことで、かかる生産現場から、いかにして世界商品たる板鉄を積出港であるストックホルムに輸送して海外に輸出したかという問題を解明する。

(4) 第四に、1747年に結成された、ストックホルムの製鉄協会 Jernkontoret の設立に注目して、その意義と影響力を解明することで、ストックホルムの成長と停滞のメカニズムを探ることとする。

(5) 第五に、旧来のボスニア海域商業強制や1724年の航海法といった商業規制政策あるいは保護貿易政策の意義を考察することによって、スウェーデン経済史の大家で

国際的な経済理論を打ち立てた経済学者であるエリ・ヘクシャーが提起した問題、すなわち小国にとっての重商主義のはたした役割について再考しつつ、問題を提起するという方法をとる。このような研究方法を通じて、商業規制が首都ストックホルムを優遇し、他の諸都市の発展を阻害したのか否か、その真の原因と実際の影響について、いっそう考察が深まることになる。さらに、このような研究によって、産業革命論に通じる諸問題、なかんずくプロト工業化が産業革命に直結するのかという問題を検討する契機も与えられることになる。

(6) 以上のように、首都機能と製鉄業を中心に研究をすすめることで、古くて新しい問題が投げかけられることになる。この二つの国家の歴史において重要なテーマについて、いかに考えるべきか。これを簡単に言えば、「鉄が都市をつくり、国を潤す」という申請者が考案したテーゼとなる。しかし、ここから出てくる政治史と経済史にかかわる問題点は多様かつ多岐にわたる。ここでそれらを一度、多くの貴重な実証研究を参考にしながら、整理・統合することで、18世紀スウェーデン社会の特異性と共時的類似性を解明していくことが、有効であると考えられる。

4. 研究成果

(1) 第一に、ストックホルムの首都化の前提条件を考察するなかで、ストックホルムの発足から17世紀の首都化にいたる過程の概説を書くことができた。これに関する成果の一部は、『スウェーデンを知るための60章』に寄稿した二つの概説である。一つは、ストックホルムについて、いま一つは、鉱山業の意義と鉄山についてであり、とくに後者では、国際的な鉄貿易の積出港としてのストックホルムの役割について論じた。

(2) 第二に、17世紀のステープル都市体系の形成要因とその効果について考察するなかから、ストックホルムの首都としての成長にとって決定的に重要であったのは、グスタヴ二世アドルフと王国宰相アクセル・オクセンシェーナの時代であったことが判明した。これについては、目下論文執筆中である。

(3) 第三に、18世紀ストックホルム史研究のなかから、本研究を企画したあとに、このプロジェクトを行なう三年間のなかで浮上してきた問題が、本研究をすすめるうえで戦略的に非常に有効であることがわかってきた。それは、「シェップスブロー」(この語を直訳すると「船橋」となる。狭義には、ガムラ・スタン(旧市街)の東岸に走る大通りで、バルト海側に面する海岸通りのことをさす。ゆえに、ここでは「船橋通り」と訳すことにした。この道路は、王城からスリュセンまで伸びており、その前面に大型の船舶が列

をなして停泊した波止場があるため、広義にはこの一帯をさして呼ぶようになった)と呼ばれるストックホルム旧市街の波止場区域に軒をつらねた卸売商人(彼らは同時代にシェップスブローアーデルン、すなわち「船橋貴族」と呼ばれた)に関する研究を行なうことである。この卸売商人は、18世紀に貿易で栄華を極めた。輸出も輸入も引き受けたが、金融にも手を染めた、いわば専門商人として特化されていない「何でも屋」なのであった。しかし、出自は外国である。イギリスからストックホルムに移住した卸売商人は鉄貿易に、北ドイツから移住した場合は、穀物貿易に従事することが多かった。この18世紀ストックホルム大商人の研究は、クルト・サミュエルソンの古典的研究があるが、この五十年間忘れ去られていた。しかし、同氏の研究書はきわめて重要で、しかも20世紀末から今世紀になって、経済史家の泰斗ラルシュ・マグヌソンの研究チームを筆頭に、クラス・ニイベリやレオス・ミュラーといった新進気鋭の研究者集団が、国際商業と大商家がスウェーデン社会に及ぼした影響について、新知見を打ち立てるようになってきている。このスウェーデン学界の新動向については、わが国では知られるところが少なく、それについて、目下論文を執筆中である。

(4) 第四に、工業化以前の工業の実態調査をスウェーデン製鉄業を事例に行なうために、ウップランド州のワロン鍛冶を推進した製鉄工場村(ブリューク)に直接赴いて、その立地条件の視察を通じて、ブリューク主(ブリュークのバトロンないし出資者)の活動と影響力、および労働者すなわち鍛冶や職工の住居や生活様式、さらにブリューク付近の農民の去就についての分析をすすめた。こうした実地調査から、17世紀のブリュークの創立者ルイ・ド・イェールに遡って研究を行うことが不可欠であることもまた、判明してきている。なぜなら、このスウェーデン工業の父と称されるルイ・ド・イェールがスウェーデンにブリュークを導入した人物であるからである。

(5) 第五に、スウェーデンの製鉄業史をめぐる諸問題のなかで重要な論点を整理していくなかで、18世紀の板鉄製造の諸問題、すなわち板鉄の高品質性を維持するための生産制限の在り方について考察を深めていけばいくほど、17世紀にウップランドに誕生したワロン・ブリュークにたいする理解が、18世紀製鉄業の前提として不可欠となってくるのが判明した。そこで、「17世紀スウェーデンの鉄商工業の諸形態—製鉄ブリュークの企業戦略」と題する口頭報告を、国際商業史研究会において行なった。これは、先に述べた(4)のルイ・ド・イェール論とあいまって、17世紀の国際武器貿易に占め

るスウェーデン製鉄業の役割の問題や、いわゆる世界システム論に代表される、世界経済の拡大の問題と関連づけた試論を、近く公表することにしたい。

(6) 第六に、以上のブリュック研究とストックホルムの船橋貴族との関連を解明することが重要であることが、本研究を通じて明らかとなった。そこで、ブリュック主(ブリュックのパトロン)とストックホルム大商人との関係を軸に、18世紀スウェーデンの社会変容について、近く論文を公表する予定である。

(7) 総じて、第七に、首都ストックホルムの18世紀における変容過程は、絶頂期から停滞期へと衰退していくように、外面的には統計上のデータに裏打ちされて示される。すなわち、他の国内の諸都市の抵抗および前進と、とりわけヨーテボリの国際貿易に占める割合の急増が、18世紀中葉から顕著となり、ヨーテボリはストックホルムに並ぶとも劣らない総輸出入の分け前を得るまでに成長した。この意味では、ヨーテボリに比して、ストックホルムは停滞したとは言える。それにもかかわらず、基底においては、ストックホルムの実質的な低落の少なさにも目を向ける必要があるというのが、これまでの本研究での結論である。換言するならば、船橋貴族の独占的繁栄の大きさとストックホルムの不変性の高い盤石性の強さと言ってもよい。しかし、新時代の到来、すなわち産業革命の到来が近づくとともに、経済の自由化と規制緩和の声が各方面から上がり、外国の出自である船橋貴族に代わって、生粋のスウェーデン人企業家が出現する。このような転換は、前者の突然の消滅によって生じたのか、あるいは後者の出現によって前者が駆逐されたのか、かかる原因の究明は、今後の研究にゆだねるほかはないが、これまでの成果を基礎に、17世紀から18世紀のストックホルム史について、板鉄貿易の観点から考察した本研究を総括する論文を、近く公表する所存である。

(8) なお、第八に、(6)と(7)のストックホルムの卸売商人の問題は、宗教迫害や戦争が理由で、スウェーデンに移入もしくは移住した商工業者の国際的移動の問題と関連するため、別のプロジェクトを立てて研究しなければならぬことが判明した。18世紀になると、宗教的にますます寛容の度合いを高める都市ストックホルムには、フランスのユグノーをはじめオランダやイギリスから多くの改革派が、自らの活動舞台をもとめて移住してきた。このような国際的移動の波にスウェーデンの鉄貿易とストックホルム商業が洗われていたとするならば、「近世ヨーロッパにおけるストックホルム商業と移民」という研究プロジェクトが想定され、それは、

国内の西側の北海に面する港湾都市ヨーテボリとの比較のみならず、北方ヨーロッパ世界における、とりわけ環バルト海世界におけるデンマークのコペンハーゲンやロシアのサンクトペテルブルクといった港湾都市かつ首都との比較研究も重要になるという、展望を得ている。

(9) 最後に、第九に、以上のような比較研究を北方ヨーロッパ世界や地中海世界ならびに大西洋を横切る両大陸世界の沿岸諸都市にも拡大するならば、近世ヨーロッパの国際商業に関する一大プロジェクトの企画も可能となるだろう。この点で、18世紀スウェーデンの対外研究に、本研究が一部を除いてあまり及ぶことができなかつたのは、時間的制約のためとはいえ、今後、小さくない課題として積み残された。くわえて、18世紀がすすむにつれて、スウェーデンのライバル国家としてロシアの勢力が膨張するという事態をいかに考えるかという問題もある。これは、18世紀スウェーデンにとって国家存亡の危機として議論された重いテーマである。このような対外問題とストックホルムの停滞がどのように関連しているかは、したがって、きわめて重要な問いなのである。なぜならば、それ以前においては、当時のスウェーデンのロシア貿易に関する情報の質と量は、ヨーロッパ随一であったからである。しかし、この問題も、別のプロジェクトを必要とする本邦未開拓の分野の一つとして残されたままである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

(1) 根本聡「時代を越えて生きる都・ストックホルム」村井誠人編著『スウェーデンを知るための60章』(査読有、明石書店、2009年、33-38頁)。

(2) 根本聡「鉄山の歴史」村井誠人編著『スウェーデンを知るための60章』(査読有、明石書店、2009年、111-115頁)。

(3) 根本聡「バルト海での抗争と移動の歴史」(書評：富田矩正著『バルト海の中世』『週刊読書人』(査読有、第2786号、2009年、4頁)。

[学会発表] (計1件)

(1) 根本聡「17世紀スウェーデンの鉄工業の諸形態—製鉄ブリュックの企業戦略」(国際商業史研究会第28回例会、2009年11月21日、於京都府立大学)

[図書] (計1件)

(1) デヴィッド・カービー、メルヤーリーサ・

ヒンカネン著 玉木俊明、牧野正憲、谷澤毅、根本聡、柏倉知秀訳『ヨーロッパの北の海—
北海・バルト海の歴史』(査読有り、刀水書
房、2011年、452頁)

共同調査

(1) 根本聡、レオス・ミュラー (ウプサラ
大学准教授)「ウップランド州ワロン・ブリ
ューク (製鉄工場村) に関する現地調査」(平
成21年8月8日～9日)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

根本 聡 (NEMOTO AKIRA)
旭川工業高等専門学校・一般人文科・
准教授
研究者番号：80342442

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし